

# 伊丹ルーテル教会 聖霊降臨後第十五主日礼拝 2020年9月13日

## 前奏：

### 招きのことば：詩編 103:8-13

主は憐れみ深く、恵みに富み | 忍耐強く、慈しみは大きい。  
永久に責めることはなく | とこしえに怒り続けられることはない。  
主はわたしたちを | 罪に応じてあしらわれることなく  
わたしたちの悪に従って報いられることもない。  
天が地を超えて高いように | 慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。  
東が西から遠い程 | わたしたちの背きの罪を遠ざけてくださる。  
父がその子を憐れむように | 主は主を畏れる人を憐れんでくださる。

### 罪の悔い改めと赦しのことば：

**会衆：**私たちは生まれつき、自分中心、わがままで、心の中に本当の愛のかけらもありません。  
思いとことばと行いで、まことの神を軽んじて、となりびとにも愛のない、神の御前に  
罪人です。神様、本当にごめんなさい。私たちは祈ります。私たちが救うため あなたが  
お与えくださった イエス・キリストによって、どうかあわれんでください。アーメン。  
(短い黙祷を持ちましょう)

**牧師：**何でもおできになる神様は、あなたのすべての罪を赦すために、そのひとり子、イエス・  
キリストを十字架の上で死に渡してくださいました。ですから神様の御言葉をとりつぐ  
務めに任じられた牧師として、今、あなたがたに宣言 します。父と、御子と、聖霊のお  
名前によって、あなたの罪は赦されました。安心して行きなさい。 **アーメン。**

## 使徒信条

**われは、天地のつくり主、父なる全能の神を信ず。**

**われは、そのひとり子、われらの主、イエス・キリストを信ず。**

主は聖霊によりて宿り、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、  
十字架につけられ、死して葬られ、

陰府(よみ)にくだり、三日目によみがえり、天に昇り、父なる全能の神の右に座したまえり。  
生ける人と死にたる人とを審かんがため、かしこより再びきたりたまわん。

**我は聖霊を信ず、また、聖なるキリスト教会、すなわち聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの  
よみがえり、限りなきいのちを信ず。 アーメン。**

## 祈り

愛とあわれみに満ちておられる私たちの父なる神様、

私たちには自分の罪を知ることが難しいです。しかし人から嫌なことをされたとき、人間の罪深さを思い知ることがあります。そんなとき私たちの心にこみ上げてくる苦々しい気持ちや、人を憎み、復讐してやりたい気持ち、自分をはかなんで消えてしまいたくなる気持ちを抑えられず、自分も同じ罪びとであることを知ります。私たちは正しい神様であるあなたに背を向け、自分のルールで生きようとする傲慢でひとりよがりな者です。しかし、あなたは御子イエス様の十字架の犠牲によって赦し、また、よみがえったイエス様のような新しい心を与えてくださいます。

今朝、私たちは自分ではどうすることもできない罪の性質があることをあらためてあなたに告白し、あなたの憐れみによりたのみます。み言葉のお約束の通り、私たちを赦し、新しくし、あなたの聖なるみさかえにふさわしく歩ませてください。私たちの教会がいつもイエス様の赦しといのちに立ち返って、互いに愛し合い、励ましあい、高めあっていく交わりとして育てていただけますようにと祈ります。

新型コロナ・ウィルスの2次感染拡大の心配を持ちながら、私たちは慎重に新しい生活を立てあげようとしています。今朝もあなたのみ言葉によって私たちを教え、新しい命の息吹で力づけてください。今週も、私たちの遣わされている所で、御名のみ栄のために歩ませてください。この祈りを、私たちの救い主であり主であるイエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 **アーメン。**

## 使徒書朗読：ローマ14章1-12節

信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることがおできになるからです。ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです。わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです。それなのに、なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。こう書いてあります。

「主は言われる。『わたしは生きている。すべてのひざはわたしの前にかがみ、すべての舌が神をほめたたえる』と。」

それで、わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです。

### 福音書朗読：マタイによる福音書 18章 21-35節

そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」

イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。

そこで、天の国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。決済し始めたところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。しかし、返済できなかったので、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。その家来の主君は隣れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。

ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。仲間はひれ伏して、『どうか待ってくれ。返すから』としきりに頼んだ。しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた。

仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。そこで、主君はその家来を呼びつけて言った。『不屈きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。

あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」

### 讃美歌 121 番

1. 馬槽(まぶね)の中に うぶごえあげ、木工(たくみ)の家に 人となりて、  
貧しきうれい、生きるなやみ、つばさになめし この人を見よ。
2. 食するひまも うちわすれて、しいたげられし 人をたずね、  
友なきものの 友となりて、こころくだきし この人を見よ。
3. すべてのものを 与えしすえ、死のほかなにも むくいられで、  
十字架のうえに あげられつつ、敵をゆるしし この人を見よ。
4. この人を見よ、この人にぞ、こよなき愛は あらわれたる、  
この人を見よ、この人こそ、人となりたる 活ける神なれ。 アーメン

### 説教「何回赦すべきでしょうか」

私たちの父なる神様と御子イエス・キリストから、恵みと平安が豊かにありますように祈りつつ、御言葉をとりつぎます。

ペテロはイエス様に尋ねました。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」

ペテロはイエス様を「主よ」と呼んでいます。わからないことを教えてほしい、すべきことを命じてほしい、と思っています。「兄弟が私に対して罪をおかしたなら何回赦すべきですか」と言っていますが、イエス様を信じて神様を天のお父様と信じるお互いである兄弟姉妹が私に対して罪を犯したならどうしたらいいですか、と尋ねているのですね。

ここに私たちのふたつの傲慢を見ます。ひとつはペテロが兄弟が私に対して罪を犯すことだけ言って、自分が兄弟に罪を犯したらどうするかということを全然考えていないことです。もうひとつは、何回まで赦すべきでしょうか、ということばに表れているように、自分は何度かは人の罪を我慢できる、赦してやることができると考えていることです。7回までですか、というのは、当時、同じ罪も2回か3回は赦してやるように、と教えられていましたので、倍の回数を赦す覚悟を言えば、イエス様から認めてもらえるかもしれないという気持ちがあったのかもしれません。

先週の主日礼拝のみ言葉は、兄弟が罪を犯したとき、教会はまずその人を裁いて肅正することを考えるのではなく、また、そのままにはれものにさわるように暴発を恐れて放任するのではなく、愛をもって真実を語り、ともに神様の御前に悔い改めて祈るようにお誘いすることを聞きました。そのような祈りの場の真ん中に赦し主のイエス様がいてくださるからです。

ペテロはイエス様のそのお話をききながら、自分に対して罪を犯してくる人、それも繰り返し罪を犯してくる人をどうするのだろう、と思ったのでしょうか。ペテロにとってイエス様のみ言葉はものごとの一般的な原則を述べている教科書のようなものではなく、自分自身が神様の御前でまっすぐに語り掛けられているみ言葉だったです。

私たちは人の罪がよく見えます。人の過ち、人のよくない思いや言葉、行いがよくわかります。人のふりみてわがふり直せ、とはよく言ったものです。ペテロのことばから私たちは自分の罪は見えず人の罪ばかり見える高慢な私のすがたが教えられます。それなのに人間関係をこわさないために相手の未熟さや罪深さを自分の方が心優しく我慢して目をつぶり水に流してあげるのだ、とまじめに考えています。

イエス様はそんな高慢なペテロに「7度を70倍するまで」と言って、無限に赦すように、むしろ罪を忘れるように、と言われました。その理由をたとえをもって考えさせてくださいました。タラントとデナリのたとえ話です。神様の御前に大きな罪びとである私が、神様のさらに大きな憐れみによって事実赦されているということを信じて自覚することの幸いを教えてくださいました。自分のした質問そのものが高慢な心から出たものであったことを教えてくださいました。するとともに、そんなペテロもイエス様の赦しの憐れみのなかにあることを語ってくださっています。

王に多額の借金した人が登場します。1万タラントといいますが、王に6000万日分の給料の金額を借金していた人です。王は返済を求めます。それは無慈悲というよりも当然の正しいことです。当然返せないのですが、自分では返済できないことを認めて神様の憐れみによりたのみます。ひれ伏して王様に猶予をお願いしたのです。驚くべきことに王様は赦してくれました。王様が決めて、まったく返済しないでもよい、と言ってくれました。その帰り道、赦されたその人は自分から100デナリの借金をしている人に出会いました。赦してあげるのかな、と思いますが、その反対で、王が自分に命じたとおなじように返済を迫ったのです。彼は赦すことはありませんでした。自分が王に赦してもらったことを自覚していなかったのです。見ていた人が心をいため王に知らせると王は赦しを撤回し、牢屋にいれました。

私たちは神様からイエス様によってどれだけ赦されているか自覚していないということです。けれども自分に対して犯す罪はよくわかるということです。そして赦せないのです。根に持つのです。復讐したいのです。恨むのです。ペテロの姿です。私たちの姿です。鏡の前に立つように、み言葉は私たちのほんとうの姿を見せてくれます。神様の前に立つ私たちの姿です。

神様は私たちがそのような罪の性質を代々受け継いでいて、人の罪が気になることをご存じます。イエス様を送ってくださいました。イエス様はののしられてものしりかえさず、傷つけられても仕返しをすることなく、「父よ、彼らをゆるしてください。自分で何をしているかわからないからです」と執り成しを祈りました。そして無実なのに十字架につけられて命を与えてくださいました。赦すためです。底知れない自分の罪と、計り知れないイエス様の愛に注目しましょう。

ヨハネの第1の手紙1章8節、9節に「自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にありません。自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます。」とあります。罪を認めて告白するなら神様は赦してくださる、というのです。でも、その理由は「神は真実で正しい方ですから」となっています。真実で正しい方なら、罪をうやむやにせず、明るみで正しく裁くので

はないでしょうか。そうです。神様は私たちの罪を正しくイエス様において裁いてくださったということです。同じ罪を二度裁くことは正しくありません。ですから「神は真実で正しい方ですから」罪を赦して、あらゆる不義から清めてくださるということです。

イエス様を信じる兄弟も罪を犯します。私たちはその人を自分の基準で裁くのではなく、またそのままにしておくのでもありません。なぜなら、私たちも兄弟たち同様に罪びとで、さらに自分の罪がはっきりとみえなくなるほど高慢だからです。そして、その罪をイエス様によって真実に、ただしく赦していただいているのです。ですからイエス様のもとに兄弟とともに進み出て、ともに悔い改めてイエス様の赦しにあずかり続けるようにと勧められているのです。

今皆さんの目の前にどんな世界がひろがっていますか。どうしても赦せなかった人ですか。どうしても忘れられない被害ですか。変えられない人間関係のパターンですか。今までどうにもならないと思って悩むこともやめてしまっていないでせうか。今日のみ言葉に聞きましょう。

主の祈りでは、我らに罪を犯すものを我らが赦す如く、我らの罪をも赦したまえ、といのりませう。我らに罪を犯すものとは、兄弟が自分に対して罪を犯す、ということです。私たちがイエス様によって私たちの罪を赦していただくとき、自分に罪を犯すものを赦すことができるということですが、100デナリの負債の返済を迫ったあの王のしもべのように自分が1万タラントの負債を赦されたことを自覚しないのが私たちの常です。ですから主の祈りで、我らがゆるす如く、というのは、我らが赦せるほどに、という意味で、全体では、「どうぞ、自分に罪を犯すものの罪を私たちが赦すことができるくらいに、私たちがあなたの罪の赦しを覚えることができますように」という祈りなのです。

私たちはこのように今までもっていなかった新しい心が与えられて、イエス様から赦されていることの喜びを、新しい思い、言葉、行いで表現して歩むことになりました。私たちの人生は、自分の夢の実現ではなく、むしろイエス様からの愛を受けた喜びの表現の人生となったのです。何回赦すべきでしょうか、と尋ねるのではなく、進んで赦し、また進んで主イエス様の赦しのもとへと人々を導く人生となったのです。自分がそんなことをできるだろうか、と振り返ることがあっても、愛の主押し出され、そのような思いがこみ上げてくる人生になりました。

この一週間も、罪を示してくださるみ言葉にとどまり、神様の御前で悔い改め、イエス様の赦しといのちをただしくいただいて、喜びを教会で互いに、家庭で互いに、社会で互いに表現する一週間となります。主の赦しといのちが満ち溢れる一週間となります。

人知をはるかに超えた神様の平安が、あなたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってください。アーメン。

**讚美歌 339 番 献金 献金感謝の祈り**

1. 君なるイエスよ、けがれし我を、洗いきよめて めぐみを賜え。  
わが日わが時 わがもの皆は 今よりとわに 君のものなり。
2. わが手は君の み業をならい、われの歩みは み跡をふみて、  
いそしみ進み、主の御力に 常にたよりにて 強からしめよ。
3. われの舌をば すくいの主の 恵みをうたう 器となして、  
わが口唇に よき音ずれを 溢るるばかり 満しめたまえ。
4. 黄金、しろがね 知恵も力も 献げまつれば、 みな取り用い、  
我のこころを 宝座(みくら)となして、み旨のままに 治めたまえや。 **アーメン**

**主の祈り**

天にましますわれらの父よ、願わくはみ名をあがめさせたまえ。みくにを来たらせたまえ。  
みこころの天になるごとく地にもならせたまえ。われらの日用の糧を今日も与えたまえ。  
われらに罪をおかす者をわれらが赦すごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。  
われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。  
国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。 **アーメン**

**頌栄：讚美歌 543 番**

主イエスの恵みよ、父の愛よ、御霊の力よ、あぁみ栄えよ。 **アーメン**

**祝福の言葉**

仰ぎこいねがわくは、私たちの主、イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき  
お交わりが、御前に集う一同とともに、今日も、この一週間も、いく久しくとこしえまでも、  
豊かにありますように。 **アーメン**

**後奏**